
PRISM プリズム

舞桜・改

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

PRISM プリズム

【Zコード】

Z6001D

【作者名】

舞桜・改

【あらすじ】

きっと、願いは叶うはずだから 都会暮らしを嫌悪する青年、純史は、父の海外出張に伴い、祖母の家に移り住むこととなる。優しく、暖かく迎えてくれた祖母と、一人の幼馴染。そして、不思議な少女との出会い。季節は初夏。夏草が薰りはじめ、突き刺す日差しが強くなり始める頃。この町で、彼の第一の生活がスタートした。

予告編（前書き）

足を運んでくださり、ありがとうございます。
皆様の「口」を動かせる作品を創作したいと思っております。
推敲が終わり次第、本編を投稿いたします。
しばしお待ちくださいませ。

それでも、僕たちは願い続ける
あいつ、願いは叶はずだから

それは雪の白でも、まじて空の青でもなかつた。

「あづい……」

「……父さん。僕、ばあちゃん

の家に行く

「久しづつ……ばあちゃん

純粹にして、潔白。

そこに邪念や私欲は一切存在せず、ただ清らかに。

「おかえりっーあつくんー！」

「久しづりだね、アツ」

あえて色に喻えるとすれば、それは透明。

神秘的に透き通ったその色には、一瞬の濁りすら見られない。

「ハリマでよ。覚悟なさい

「あら、私を満足させてくれる

のかしい

「私、絶対に諦めません」

たがそれは、同時にとても儚く、そして脆い。

全てを受け入れ、全てと共に存する。
そして、ゆっくりと消えていく。

「古い言い伝えだ……ま、童話と思つて聞いてくれ

も嬉しくないよつー」

「このままおじや、君は……」

どんなものよりも儂く。

「嫌だ……嫌だよ……」

どんなものよりも純粋で。

「わたし……ずっとあなたを信じてる。」

どんなものよりも清らかなそれは。

「いいで、誓おつ」

まるで水のように“透明”だった

PRISM プリズム

童話の中に生かされた登場人物は、自分の役目を全うしようと。
そこにふらりと現れた青年は、そんな運命に抗おうと。

「久しぶりだよな……何もかもが」

「そうだよね……5年

ぶりだもんね」

「最初から諦めてたら、何にもできつこになくな

「…………でも、諦めなきもいけ
断ち切るすべを、探して彷徨う。

「…………でも、諦めなきもいけ
なこことあるのよ

「僕らの出会いは、決して無駄なんかじやなかつたってこと。
僕らは出会い、成長していく。

「…………うそ

「…………うは、ルビーのよう。

「…………うは、サ

「…………うは、アイアのよう。

「…………うは、Hメラルグのよう。

「…………うは、ダイアモンド

「…………うは、水晶のよう。

僕たちは、幻想的に透き通る。

どこまでも僥ぐ、

どこまでも“透明”な物語

濁りきつた都会暮らしを嫌惡する青年、純史は、父の海外出張に伴い、祖母の家に移り住むこととなる。

数年ぶりの再会にも関わらず、優しく、そして暖かく迎えてくれた祖母と、二人の幼馴染。

季節は初夏。夏草が薰りはじめ、突き刺す日差しが強くなり始める頃。

この街で、彼の第一の生活がスタートした。

予告編（後書き）

いかがでしたでしょうか。
寸分でも期待していただけたら幸いです。
本編は近日公開いたします。

登場人物（前書き）

登場人物の紹介です。

尚、このページは随時更新されていきますので、こまめのチェックをお願いいたします。

登場人物

登場人物紹介

このページは物語が進むにつれて徐々に更新されていきます。
こまめにチェックをお願いいたします。

白河 純史 17歳 4月15日生まれ

主人公。

父の仕事の都合で、祖母の家に移り住むこととなつた少年。
自然を好み、都會での生活をひどく嫌う。

根は優しく、それで自分が損することもしばしば。
数年前までは、若菜と朱希と共によく遊んでいた。

青葉 若菜 16歳 9月21日生まれ

隣家に住む少女。

明るく親切な性格の持ち主で、何事にも前向きに取り組む。
料理は苦手らしいが、裁縫や小物を作るのは得意。
数年前までは、純史と朱希と共によく遊んでいた。

赤穂 朱希 17歳 7月14日生まれ

隣家に住む少女。

純史や若菜の姉的な存在にして、絶対的な存在。

勉学、スポーツ、共に優秀。またに絵に描いたような理想の女性像。

純史たちが通う学校の生徒会長を務める。

数年前までは、純史と若菜と共によく遊んでいた。

スイ　??歳

引越し初日、純史の前に現れた少女。
外見は敦史と同年齢程度の少女だが、どこか神秘的な雰囲気を内
に秘めている。

寡黙で、あまり自分から口を開くことはない。
詳細は一切不明。

白河 光江

純史の祖母。

穏やかでしつかりとした性格。

数年ぶりに純史が訪れてきたことを本当に喜び、彼を手厚く歓迎
する。

第一話 純粹なる金剛石 Diamond

・・・・・(1) (前書き)

第一話の前編部分となります。

この小説は、基本的に一話を数部分に分割して投稿していくます。では、本編スタートです。

第一話 純粹なる金剛石 Diamond . . . (一)

“それ”は雪の白やでも、まして空の青さでもなかつた。

純粹にして、潔白。

そこに邪念や悪意は一切存在せず、ただひたすら清らかに。

あえて色に喻えるとすれば、“それ”は透明。

神秘的に透き通つたその色には、一点の濁りすら見られない。

たが“それ”は、同時にとても儂へ、そして脆い。

全てを受け入れ、全てと共に存する。

そして、ゆりべつと消えていく。

そこには、そこそこなこと。

確かに存在しているのに、直視することができない。

決して、掴むことはできない。

どんなものよりも儂へ。

どんなものよりも純粹である。

どんなものよりも清らかな“それ”は。

まるで水のよう“透明”だった

.....

.....

.....

昔から、都会暮らしが嫌いだった。

絶え間なく行き交う車のエンジン音は、耳障りで仕方がない。

高々と突き上げられた煙突から排出される煙には、吐き氣すら覚えた。

こんな土地、人間が住むような場所じゃないとさえ思つたこともあつた。

だから、父の仕事の都合で自分が地方に移り住むのだと知らされた時には、心の底から歓喜したのを覚えている。

ガタン、ガタン、ガタン。

駅を移るたび、段々とその様相を変えていく風景を楽しむため、僕は鈍行列車を利用して目的地を目指していた。

正面には、熟睡を続ける老人。電車の揺れに合わせ、その皺だらけの顔をカククリカククリと傾かせる。それでも全く起きる気配を感じさせない老人の睡眠欲は、僕に密かな敬意を抱かせた。

老人の隣には、妻と思われる老婆。そんな夫の様子を見て、呆れるような、それでいて嬉しそうな微笑を浮かべている。

ふと、正面の老婆と目があつた。老婆は苦笑いを浮かべたまま、

こちらに軽く会釈を寄越す。それに対し、僕も微笑みながら会釈を返した。

線路の上を電車が走る音を聞いていると、不思議と気分が落ち着いてくる。一定に思えるリズムも、耳を澄ましてみれば、案外不規則なものだった。

線路に刻まれた凹凸が電車を揺らし、視界をも揺さぶらせん。窓の外に視線を向けてみると、次々と過ぎ去っていく民家が目に映つた。今、僕らの乗る列車が走っているこの地には、昨日まで住んでいた大都会の雰囲気など微塵も感じられない。木々は生い茂り、降り注ぐ日差しがそれらを照らしている。

目的地は、すぐそこまで来ていた。

その話が僕の耳に届けられたのは、一月半ほど前のことだった。

第2学年に進級してから、数日が経過したある日。

いつもと変わらぬ夕食風景。

ダイニングに設けられた巨大テーブルを、母、父、そして僕の家族3人で囲む。

兄や姉の独立で、少しだけ寂しくなった食卓。

母の料理の中でも特にお気に入りだった卵焼きを、自分の箸が掴んだのと同時に、父が突然こう切り出した。

「……純史、しばらくの間、都会を離れて地方で暮らしてくれないかい？」

その言葉は、まず僕に驚きを与えた。

掴んだはずの卵焼きは真っ二つに切断され、その二つの一つを母の箸が素早く捕らえる。

何の前触れもなく、突然父の口から放たれた言葉を理解するには、数秒の時間を必要とした。

“都会を離れて地方で暮らす”。

考えてみれば、確かに僕にとって嬉しい提案ではある。

だが、あまりに突然すぎる発言に、それも理由も聞かず手放しで喜べる筈などなかつた。

「ず、ずいぶんと急な話だね？ なんで？」

そう。まずは理由を聞かねば始まらない。

父が勤めている会社から左遷を命じられ、それが理由で地方に引越す……仮にそのような類の理由であるならば、当然それは喜ぶべきことではない。いくら都会を嫌っているからといって、さすがに

家族の不幸を引き換えてまで地方に住みたいとまでは思わない。

「……まさか、左遷された……とか？」

考えている内に現実味を帯びてきてしまった疑問。確認する意味で、父に尋ねる。

「ははは！ 残念ながら違うよ。むしろ、その逆だね」

父は、僕の不安を笑い声で一蹴し、言葉を続ける。

「実は、アメリカ支社から技術協力の依頼がきて、しばらく出張することになったんだ。何でも僕個人を指名してたらしくて。いや、僕なんかが行つてもあまり意味は無いと思うんだけどさ。社長がどうしてもつて言うから」

父の勤務する会社は、日本はもちろん、海外でも幅広くその名を知られているIT企業である。中でも、アメリカ支部の売り上げは他社に比べてもダントツで、本社に匹敵する程の売上高を記録しているとの事だ。

そのアメリカ支部からの協力依頼、それも個人指名となれば、左遷だなんともつての外。父の技術が信用されている証拠だろう。

「何言つてるのよ、あなた。本社はあなたが支えていくようなものじゃない」

照れたような表情を浮かべる父に、母の言葉が浴びせられる。

そうである。父は謙遜しているが、実際父の業績は、並の社員のそれとはまったく比べ物にならない。若くして本社の重役ポジションを任される程の業績をあげているのだ。

今や、父は社長が最も期待を寄せる人物であり、社内からは次期社長との呼び声も高い。

そんな父だからこそ、アメリカ支社は協力を依頼したのだろう。

「でも、あなたがいなくなつたら本社は大丈夫なのかしら？」

「大丈夫さ。僕がいなくたつて本社は成長していける。それに、これは単なる技術協力で、ずっと海外にいるわけじゃないからね。社長は、“本社の心配をするより先に、まず喜びなさい”って言ってくれたんだ。本当にあの社長らしいと思つたよ」

そう言って、父はにっこりと微笑む。

「で、せっかくだからその申し出を受けようと思つて。……とは言つても、僕はこの通り、奥さんがいないと何も出来ない駄目人間だから、沙希にも一緒に来てもらいたいと思つ。だけど、純史は海外なんて行きたくないだろ?」

父の言葉に、僕は小さく頷いた。

アメリカ支社が設けられている土地と言えば、ヘタをすればここよりもさらに都会である。さすがに、これ以上劣悪な環境下へと移り住むのは避けたかった。

「そうだろ。かといって、純史にも一人暮らしはまだムリだと思う。だからさ、純史には、しばらくお祖母ちゃんの家で生活してもらおうと思つていいんだ」

父は、依然として微笑みを浮かべながらそう告げた。

祖母の家　父の仕事の都合上、ここ数年は訪れていなかつたが、小学校を卒業する以前までは、長期休暇に突入する都度遊びに行つていた記憶がある。

極端に田舎といつわけでもなく、かと言つてこの街ほど都会といつわけでもない。

ただ、多くの自然が残るその町は、とても穏やかで。

この街が失つてしまつた多くの何かを、まだ持つているような気がした。

そんなあの町に、幼い僕は憧れていたのだ。

「もちろん、その時は今の高校とかも転校してもらつちゃうことになるけど。もし、どうしても転校が嫌なら、一人暮らしをして構わないよ。幸い、出張までは後一ヶ月半ほどある。その間に、一人暮らしのノウハウを叩き込んでやるさ」

「……一人じゃご飯も作れないあなたじや無理でしょ」

意氣込んで発言した父に、母の冷ややかなツツコミが炸裂する。床ごと地面にめり込みそうな勢いで落ち込む父を慰めつつ、僕は考えた。

……この町の環境は兎も角、今の高校生活は悪くないし、離れるのは少しばかり惜しい。

だが、それ以上の魅力が、あの町にはあった。

記憶は曖昧だが、幼い頃にあの街で感じた“安心感”や“慰安感”は、まだ心に残り続けている。

ずっと憧れていた“地方”に。それも、自分が昔から大好きだった街への引越し。

……迷いは、既に無かった。

「……父さん。僕、ばあちゃんの家に行く」

父の目を見て、僕はきつぱりと言い切った。

結論を出すまでに一分と掛からなかつたが、父は僕の答えをあらかじめ予想していたのか、特に動じる様子も無く、静かに頷いた。

「そうか。……迷惑を掛けますまいね。都会を離れての生活は大変だと思うけど……頑張ってくれ」

「うん。分かってるよ。だから、父さんは安心してアメリカに行つてきて」

「……ああ。ありがとう。僕もしつかりやつてくれるよ」

父は再び嬉しそうに微笑み、決意の込められた声を上げる。

「純史……お母さんも行つてしまつけど、しつかりね」

「大丈夫だよ、母さん。一人暮らしをするわけでもないんだし。それに、僕は父さんほど生活力に乏しくないよ。だから、母さんは父さんの面倒をしつかり見ててあげて」

心配そうにこちらを見つめる母に向けて、僕は言った。

僕の言葉を受け、母は安堵したようにため息を一つ吐き出すると、コクリと大きく頷く。

「……」

……父や母と離れて、地方に移り住む。

不安が無いといえば嘘になるし、寂しさも感じないわけではない。だが同時に、不安を上回るほどの期待と嬉しさが、僕の中にしつかりと根付いていた。

不安。

期待

卷之二

これら全てを胸に抱え、僕は行く。

思い出の欠片が散らばる、あの町……“透水町”すみなまちへと

■ ■ ■ ■ ■

- - -

- 1 -

19

「あーい……」

電車を降り、駅から出ると、そこには灼熱地獄が待ち構えていた。太陽から降り注ぐ、ダイヤモンドのような光の線が、人々の肌をジリジリと焼いていく。

陽炎が、アスファルトの先の景色を滲ませた。

た辺りだと言ひのこ、気温は真夏のやれとをして変わらぬ。

この透水町と、昨日まで自分が住んでいた町、どちらが暑いか比べてみようとも思つたが、絶大な暑さの前には小さな競争など意味を持たないらしい。結局、“どちらも暑い”という結論に至る。

「んうと……まあちやんの嫁ね」

駅前のコンビニで購入した棒つきのチョコレートアイスを口に咥

えながら、持参してきた地図を広げる。

アイスの表面に浮かぶ水分は、まるでアイスがかいた汗のようだ。溶けたアイスが地図の上に落ち、その部分を軽く湿らせた。

「ん。あつた。……歩いていける距離だな」

“はずれ”と書かれた棒をゴミ箱に放り込み、僕は再び灼熱地獄を歩み始めた。

第一話 純粹なる金剛石 Diamond

・・・・・(1) (後書き)

次回予告

数年ぶりに訪れた、祖母の家

「久しぶり……ばあちゃん」

再会する、二人の幼馴染

「お、おばーちゃん！ あっくんもう来た！？」

「ピンポーン。 大正解！ 久しぶりだね、アツ」

催される歓迎会

「では、改めて……おかえり、あっくん！」

「……ははっ。悪いけど、僕のノリは半端じゃないよ。若菜についてこれるかな？」

次回 PRISM プリズム 第一話 純粹なる金剛石 Diamond
a m o n d (2)

風に乗って、夏草の薰りがした。

都会では決して漂うことのないその薰りは、僕の心を落ち着かせ、どこか懐かしい気持ひにさせてくれる。

道路に面する歩道。

人通りはそれなり多いが、耳障りな車のエンジン音は殆ど聞こえてこない。

常に車のエンジン音と隣り合わせの生活をしていた僕にとって、それは非常に新鮮だった。

道沿いに植えられた木々は、優しい“自然”を感じさせる。

木漏れ日によらされた道は、まるでピースの欠けたジグソーパズルのようにも見えた。

「この辺りだと思うんだけど……」

本日3本目となるアイスをかじりながら商店街を抜けると、そこには閑静な住宅地が広がっていた。

穏やかな景色に、ゆつたりと並ぶ家々。アパートの類はあまり見られず、主に一階建ての家屋が多いようで、中には築数年も経過していないであろう新築の家屋もちらほらと見られる。

地図が正しければ、祖母の家はこの辺りに位置しているはずである。

言われてみれば、この地にまったく見覚えが無い訳でもない。ほんやりとではあるが、何か懐かしい感覚が、自分で中で渦巻いてい

た。

「ここか……」

しばらく歩き続け、一軒の家の前へと到着する。

周りの家々と同じように、一階建ての構造。庭は広く、数本の樹木と数種の植物が植えられている。門には、“白河”と刻まれた表札が、堂々と輝いていた。

間違いない。祖母の家である。

ただ、以前に自分が来た時よりも、全体的に面積が小さくなっているように感じる。

大人と子供では遠近感が異なると言つし、これも自分が成長した証拠だろうか。

しかし、それは同時に、それほど長い期間この家に訪れていたかったという明確な事実を示していた。

「とりあえず……中に入ろう!」

やや錆付いた門を開き、家の敷地へと足を踏み入れる。柔らかな“土”の足場が、疲れた足に心地よかつた。

玄関の横に設けられた呼び鈴を押そうとして、一旦指を止める。身内の家ではあるが、訪れることが自体が随分と久しぶりであるため、やはり緊張を感じた。

「ふう……」

一度深く深呼吸をすると、意を決し、再び呼び鈴に指を伸ばす。チャイムの音量が最大に設定されているのか、家の中に響き渡る呼び出し音は、外にまで洩れてきた。

数秒後、玄関が開けられ、中から懐かしい人物が姿を現した。

「おや……純史！」

「久しぶり……ばあちゃん」

祖母の姿は、数年前と殆ど変化していなかつた。

肌に刻まれた年輪と、柔らかな表情が、温和な人柄を感じさせる。白髪だらけの頭髪は、年不相応にきちんと整えられていた。

75を過ぎても、身体はまだまだ健康体そのものらしい。姿勢は

23

崩れておらず、杖に頼ること無くしっかりと自分の足で立っている。

「さあ、早くお入り。長旅で疲れたらう」

「うん。お邪魔します」

立派な装飾が施された玄関を潜り抜け、僕はまず、リビングに通された。

テーブルの周りには立派なソファが設けられ、その前には、自分の家にも劣らぬ巨大なテレビが設置されている。そよぐエアコンの風が、体にこびり付いた汗を一瞬で乾かしてくれた。

エアコンに、巨大テレビ、そして立派なソファと、とても75を過ぎた老年者の一人暮らしとは思えない室内装飾である。

「いやあ……よく来たねえ！ とりあえず、ソファにでも座つて休んでおくれ」

祖母はそう言つと、よく冷えた麦茶を持つてくれた。それを一瞬で飲み干し、体の中の潤いを取り戻すと、言われたとおりソファに腰掛ける。ソファの柔らかな感触が、体の節々に蓄積された疲労を緩和していくのを感じた。

「本当に懐かしいよ……何年ぶりかねえ」

正面に腰掛けた祖母が、昔を懐かしむかのような口調で言つた。

「最後に来たのが小学校高学年だから……少なくとも、5年くらいは来てなかつたと思う。……『ごめん、ばあちゃん。來るのがこんなに遅くなっちゃつて』

「いやいや。そんなの気にすることはないよ。そっちにも都合があつたんだから。それに……」

一呼吸おいて、祖母は続ける。

「じつにも、孫みたいな子たちがいたしね」

言いながら、祖母はニッコリと優しそうな笑顔を浮かべた。

「孙みたいな子たち……？」

その時である。

玄関の方から、何やらドタドタと騒がしい音が聞こえてきた。どうやら足音らしい。とても軽快とは言い難いその足音は、そのまま

驚異的な速さでリビングのある方向へと向かってくる。

鍵も閉めていなかつたし、もしかすると空き巣や泥棒といった類の侵入者かもしねー。

そう思い立ち上がると、廊下とリビングを繋ぐドアが、勢によく開かれた。

「お、おばーちゃん！ あっくんもう来た！？」

現れたのは、おそらく自分と同年輩であろうと思われる少女。紺碧の髪は一つに結われ、大きく見開かれた瞳は、光を受けて群青に輝いている。

小わめの身長と愛らしい顔立ちが、やや幼げな印象を与えた。よほど急いで来たのか、少女は乱れた呼吸を整えるのに悪戦苦闘のご様子である。

「おや、若菜ちゃんかい。到着済みだよ。ほら、この通り」祖母は再び優しげな微笑を浮かべながら、左手で僕を指し示す。祖母が口にした少女の名前、“若菜”。

この名前には、確かに聞き覚えがあった。

薄れ掛けていた記憶のピースが、一かけら、力チリと音を立てて当て嵌まる。

「若菜って……あの“若菜”か！？」

「う、うん！ そうだよ……！ 若菜だよっ！ ……あっくん！ ひさしぶりっ！」

そう言つて、若菜は思い切り僕に抱きついてきた。そのまま押し倒されるかと思ったが、若菜の体重は思った以上に軽く、大した衝撃は感じない。むしろ、肉体面以外での衝撃の方が大きかった。

「わ、若菜……離れてくれっ！」

「やだやだっ！ 離したら、あっくんまたどつかに行っちゃうもん！」

見れば、若菜は喜びの中に悲しみを溶け込ませたような表情を浮かべていた。

当時の若菜にしてみれば、僕がこんなにも長く透水街を離れると

は夢にも思つていなかつたのだろう。それは僕も同じだつた。

ある時期突然、堰を切つたように父の仕事が忙しくなり、次の長期休暇には祖母の家に訪れることが出来なくなつてしまつたのである。続いて次の休みも、その次の休みも。

いつの間にか、それは習慣化されていた。その習慣は決して破られることがなく、五年以上もの歳月を経て、今に至る。

そんな長い年月を経ても尚、若菜は僕を待ち続けていてくれたのかかもしれない。

「……ごめん、若菜。でも、今度は大丈夫。当分の間はこの家に住むから」

「……本当？」

群青の瞳を潤ませて、若菜はそう僕に尋ねる。
昔から、若菜の瞳は純真だった。

どこまでも澄んでいて、胸の内に秘めた希望を象徴するかのように、キラキラと輝いている。

そんな瞳を前にして、冗談など言えるはずも無かつた。

「もちろん、本当だよ。」

そう言つて、若菜の小さな頭をくしゃりと撫でてやる。
艶やかな紺碧の髪から漂つ、ミントのような甘い香りが、僕の鼻を刺激した。

「やつたー！ 嬉しいよあつくんーー！」

「ぐあっ」

若菜は僕を解放するどころか、あらう事か締め付ける腕により一層の力を込めてきた。

その小さく細い腕からは考えられない、尋常ならざる力。

全身の骨が、ミシミシと鈍い音を立てて軋んでいくのが分かる。

「わ、若菜……くるし……」

「はーい、そこまで」

墮ちかけた僕の耳に、女性の澄んだ声が届けられる。

同時に、全身の自由を奪っていた力は緩められ、僕の身体は完全

に解放された。

咳き込みつつも、一杯に空気を吸引し、足りなくなつた酸素を肺に取り入れていく。

「けほつ……はあ……はあ……し、死ぬかと思つた……」

「アツ、大丈夫？」

声の掛けられた方を見上げてみると、そこには、スラリとした長身の少女。

朱色掛かつた髪をポニー・テールにして後方に束ね、双瞳は、まるで夕焼け空のように真紅の輝きを放っている。

凜々しくも端麗な顔立ちが、やや大人びた印象を僕に抱かせた。

「もしかして……アキ姉！？」

「ピンポン。 大正解！ 久しぶりだね、アツ」

目の前の少女 アキ姉は、そう言つて二コリと微笑む。多少の上品さが伺えるものの、どこか人懐こい笑顔。

数年が経過した今でも、それは以前と変わらぬ輝きを誇つていた。「純史もご存知の通り、“青葉 若菜”ちゃんと“赤穂 朱希”ちやんだよ。この2人が私の孫みたいな子たちさ」

祖母は両手で二人を指し示しながら、穏やかな声でそう告げる。

「そつか……この2人のことだつたんだ……」

若菜とアキ姉。

隣家同士といふこともあつてか、僕がこの街に訪れ、最初に友人になつた2人。

毎日のように、遊んで、騒いで、怒られて。

夏の日差しが突き刺す日も、冷たい雪が降り注ぐ日も、よく3人で一日中楽しく過ごしたものだった。

この街で刷り込まれた記憶の中でも、ひときわ輝く思い出の一つである。

「まったく、若菜ったら。アツと会えたのが嬉しいのは分かるけど、もう少し手加減しなさい

「1」「ごめんなさい……」

アキ姉の注意を受け、深くうな垂れてしまつ若菜。それを見て、僕はいつぞやの父の姿を思い出した。

「ま、まあまあ。若菜にも悪氣があつたわけじゃないよ。今度からは気をつけてくれれば。……ね？」

「あつくん……」

「……ま、アツならそいつ言つと思つてたわよ

苦笑いを交えつつ、アキ姉は呟く。

呆れているようで、それでも、何だか嬉しそうで。ちょうどビ、数時間前に電車で会つた老婆に似た表情を浮かべながら。

「とりあえず、僕は着替えて荷物を整理していくよ。おばあちゃん、悪いけど、案内してくれないかな？」

汗が染み込んだシャツは、ベットリと湿りきついて気持ち悪い。エアコンから吹き出る冷風が、少しだけ肌寒く感じた。

三人との再会は嬉しいが、まずは荷物を整理し、心身ともにスッキリとした状態で話がしたい。

「ほいほい。お安い御用さ

物腰軽く立ち上がり、早々とリビングを出て行く祖母を、僕は急ぎ足で追いかけた。

…………

案内されたのは、綺麗に整えられた一室だった。

床には埃一つ見受けられず、空の本棚も、大きな机も、光沢が出るほど丹念に磨かれている。

ベルンダへと続く大窓は、鮮やかな日差しを取り入れ、部屋の中央に巨大な光の絵画を描いていた。

隅に置かれたベッドは立派。真っ白なシーツから漂う太陽の香り

が、快適な安眠を約束してくれる。

家具以外、私物は一つとして置かれていなかつたが、不思議と殺風景な印象は受けなかつた。

以前過ごしていた自室に比べればやや窮屈ものの、それほど大柄でもない僕が一人で過ごす分には、十分過ぎるほどのお部屋である。

「この部屋、本当に僕が使っていいの？」

「もちろんだよ。もともと誰も使ってなかつた部屋だし、気にせず使っておくれ」

突然居座ることになつた僕に、これほど立派な部屋を下さってくれた祖母。

きつとこの部屋も、一生懸命掃除してくれたのだろう。それなのに、祖母は疲れた様子ひとつ見せなかつた。

「ありがとう、ばあちゃん」

「いやいや。大切な孫の為だからね。こんななお茶の子をこさいたいだよ」

そう言って、祖母は柔らかな笑みを浮かべた。

肌に刻まれた無数の皺が、笑顔によつて更に数を増す。それらの皺、一つ一つが、祖母の優しさを象徴しているかのように思えた。

「それじゃアリビングで待つて。着替えたらすぐに行くから。いっぱい話がしたいしね」

「はいよ。若菜ちゃんも朱希ちゃんも、きつと純史を中心にしてるよ」

言いながら部屋を出て行く祖母を、僕は軽く手を振つて見送つた。

「では、改めて……おかえり、あつくん！」

リビングに、若菜の透き通つた声が木霊する。

その声を合図にするかのように、オレンジジュースの注がれた4つのコップがぶつかり合い、“キンシ”と甲高く、心地よい音を響かせた。

綺麗な橙色の液体がコップの中で振動し、小さな波を立てる。

「おかえり、アツ」

「おかえり……って言うのも変だけど、おかえり、敦史」
ソファに囲まれるように設けられたテーブルには、千万無量の菓子、飲み物、料理などが、所狭しと並べられている。

全て、今日という日のために用意された物だそうだ。

正直、ここまでしてもらつては逆に悪いような気もするが、わざわざ僕のために用意してくれたのだと考へると、せつかくの好意を無碍にするわけにもいかなかつた。

それに、実は自分自身、少しばかり嬉しかつたりもある。

こんなにも歓迎されていることは勿論、何より長年の空白を経ても、若菜たちとの間に摩擦が生じなかつたこと。

外地から移住してきた僕にとって、これほど心強いものはない。

「ほらほらあつくん！ もつと食べて食べて～！」

先ほどから若菜が次々と料理を勧めてくるが、僕の意識は、料理よりも若菜の格好に向けられてしまつていた。

彼女は大量のクラッカーをハーフパンツのポケットにしまい込み、小さな頭には、パーティー用のキラキラとした三角帽子を乗せている。

右手には、鼻メガネらしき物体もチラリと確認できた。

これは用意周到と褒めるべきなのだろうか。

「若菜……そのカツコ、何？」

「何つて……せっかくあつくんが帰ってきたんだもん。パーティと騒ぎたいよ」

そう言つて、若菜はポケットに入れられていたクラッカーの一つを取り出し、天井に向け“パンツ”と打ち鳴らす。聞こえてきた音

は、どこまでも乾いていた。

「だからって、そんな……」

「まあまあ、アツ」

言いかけた僕の言葉を、アキ姉の声が遮る。

「若菜ね、アツが来る田をずっと楽しみにしていたのよ。もう、はしゃいじやつて。一体何度、暴走する若菜を止めたことか……」

アキ姉は、呆れたように肩をすくめながら。

「でもね……」

再び顔を上げ、彼女は続ける。

「若菜の気持ちも分かってあげて。……アツが来なくなつて、若菜は本当に寂しそうだつたの。その分、今日が本当に楽しみだつたんだと思う。だから、今日だけは……若菜のノリについていつてくれないかな?」

「アキ姉……」

チラリと若菜に田を向ける。

表情は、あくまで明るい。笑顔で歪められた表情は、この場を真摯に祝福し、歓喜しているように見えた。

“無邪氣”。

形容矛盾を冒してまで、他の表現を探す必要もない。

彼女の浮かべる笑顔を形容するのに、これ以上適切な言葉など存在しなかつた。

「……ははっ。悪いけど、僕のノリは半端じゃないよ。若菜についてこれるかな?」

挑発するような笑みを浮かべつつ、同じく挑発するような口調で、僕は言った。

「……えへへ！ 私だつて負けないよー！」

僕たちは互いのグラスを触れ合わせ、注がれた液体を一気に飲み干す。その後、田の前に高々と積み上げられた料理の山にかぶりついた。

傍目には下品な光景だが、そんなものは気にならない。僕の姿を

見た二人は腹を抱えて笑い転げ、一人は心底呆れている様子だが、そんなものは気にならない。

「あはははは！……おかえりっ！あっくん！」

2本のクラッカーを同時に打ち鳴らしながら、若菜は三度その言葉を口にした。聞こえてきた その音は、どこまでも澄んでいるよう に感じた。

さて、若菜のノリにどこまでついていけるかな。

次回予告

昔と何も変わらない、僕らの関係

「“でも”じゃない！ ホラッ！ お姉さんの言つことこな素直に従う！」

「それじゃね、アツ。明日からは、またいっぽい遊ぼう」

そして、この町の純粹な自然

「気持ちいいな……」

「ん……なんだろ」

昔のまま、純粹なまま残されていた自然の中で、僕は彼女と出会い

つた

「君は……」

次回 PRISM プリズム 第一話 純粹なる金剛石

Di

amond (3)

時刻が午後6時を回ったところで、歓迎会はお開きとなつた。まだ時間的には余裕がないこともなかつたが、明日は月曜日。転入手続き中の僕は良いとしても、若菜やアキ姉は普通に学校がある。あまり遅くまで騒いで授業に影響しては困るだらうとこつことで、僕が早期解散を提案したのだった。

「…………すう。…………すう」

背中から聞こえてくるのは、規則正しい寝息。乱れず、穏やかに、一定のリズムで刻まれ続けている。

歓迎会で一番のはしゃぎ様を見せていた若菜。歓迎会がお開きとなつた瞬間、電池が切れたかのようにグッスリと眠り込んでしまった。

「ゴメンね、アツ。若菜をおぶらせちゃって……」

「や、気にしないでよ。全然軽いし。通学鞄のほうが重く感じるくらいかな。いつもパンパンだから」

オーバーな表現ではあるが、そう感じさせむほどに若菜の体重は軽かつた。

大体どれくらいだろうかと想像力を働かせていると、僕の首に回された若菜の腕の力が、急に強まつたように感じた。ふと、先ほど味わつた死の恐怖を思い出し、すぐさま無理矢理思考を停止させる。さすがにこの歳で死に急ぎたくない。

「……はい、着いた。とは言つても、すぐ隣なんだけどね」

祖母の家を出発してから、ほんの数歩。

「それじゃ、若菜を中に運ばないと。今日、若菜のお母さんは留守なんでしょう？」

歓迎会の最中に耳にしたのだが、若菜の母親は、3日前から一週間の旅行に出かけているらしい。なんでも、ちょうど僕がこの街に越してくる日と旅行とが重なつてしまい、出迎えが出来ないことを

ひどく嘆いていたそうだ。

若菜は幼少時に父親を亡くしている為、母親が不在のときは、必然的に家に一人、ということになってしまつ。尤も、そのような時はアキ姉が自宅に若菜を招待し、宿泊させる、というのが習慣化しているようではあるが。

「あ、いいわよ。後は私がやるから。あれだけ騒いだんだもの、アツももう疲れてるでしょ？ し、今日はゆっくり休みなさい」「でも……」

「“でも”じゃない！ ホラフフ… お姉さんの言つことには素直に従う！」

アキ姉は僕の背中から若菜を剥ぎ取ると、その小さな身体を今度は自分の背中に背負い込んだ。

もはや、何を言つても無駄だらう。アキ姉が自分の事を“お姉さん”と呼称する瞬間、彼女に対する全ての発言はその意味を失い、無効化されるのだから。

「はいはい、分かったよ。けど、アキ姉だって明日は学校なんだから。あんまり無理しちゃ駄目だよ」

「分かっているわ。相変わらず心配性ね、アツは。けど、ありがと」アキ姉は二コリと微笑みながら、僕の頭に自分の手を置いた。数年前ならば兎も角、現在では僕よりも身長の低いアキ姉に頭を撫でられるというのも、傍目に見れば妙な光景ではある。

だけど、僕はその手の温もりに数年前と変わらぬ安心感を覚えた。結局、“お姉さん”はどこまでも“お姉さん”らしい。

「それじゃね、アツ。明日からは、またいつぱい遊ぼう

そう言つと、僕に笑顔を向けたまま、アキ姉は家中へと消えていった。

玄関前、最後に見た若菜の表情は、心なしか、僕に“バイバイ”と告げている…… そう、見えないこともなかつた。

別に疲れていないわけではなかつた。ただ単に、自分の好奇心に抗えなかつただけだ。

久しぶりに訪れたこの街。懐かしい風景を前にして、家で呑氣に休んでいられるはずもなかつた。

編入試験は数日前に済ませてあるし、その編入は一週間先。今日明日と多少無理をしたところで、大した影響は無いだろう。むしろ、有り余る好奇心を押さえて家でじつとしている方が、体に毒というものだ。

自分の欲求に素直になるとこゝが、健康への一番の近道……といつ受け売りを、以前誰かから聞いたことがあつたような気がする。あまりハメを外しすぎるのは良くないと思うが、案外、的を射た言葉ではないだろうか。

「さて、と……それじゃあどこに行こうかな……」

外の景色はまだ明るさを保つていた。

地平線の向こう側へと沈む夕日が、街全体を茜色に染め上げていく。相変わらずの暑さではあつたが、風が出てきた分、昼間よりはいくらか涼しいように感じた。

そんな街中を、特に行く当てもなくぶらぶらと歩く。

道端に咲く花。

虫達の鳴き声。

夏草の薫り。

新鮮な空気。

都會には決して無かつたこれらの要素が、ただの散歩を飾り立ててくれる。この地に住む人々にとつては別段珍しいものではないの

かもしだれないが、僕にとってはこれら全てが極上の素材だった。

商店街にひしめく人たちの何気ない会話の中にも、微かな優しさや思いやりが感じられる。八百屋の威勢のいい売り声は、どんな楽器よりも深く僕の胸を震わせた。

甘い香りに誘われて購入した串団子にかぶりつきながら数分ほど歩いたところで、僕はのどかな河原へと到着した。

夕日に照らされた川の水は、綺麗なオレンジ色の光を放っている。水の流れる音以外には何も聞こえない周りの静けさも相まってか、僕にはここが、とても神聖な場所に感じられた。

「ちょっと……休んでこつかな」

草のクッショוןの上に、ゆっくりと腰を下ろす。そのまま倒れこんで大の字に寝そべりたい気持ちにもなつたが、さすがに自粛しておいた。どこか懐かしい薰りを含んだ風を全身に浴びるだけでも、疲れた体は十分癒されそうだ。

「気持ちいいな……」

こんなにものどかな自然に囲まれながらゆっくりと休んだのは、一体何年ぶりだろうか。昨日まで住んでいた都会にも自然公園なるものが点在していたが、心無い者たちの悪戯や、モラルの欠片もなぐバイクで進入してくる者たちが原因で、もはや自然公園などとは呼べないまでに酷変してしまっていた。そんなにも荒んでしまった自然公園に、僕は到底足を運ぶ気にはなれなかつた。

だが、この街の自然は違う。

荒らされていないことは勿論として、自然を“造りう”として設けられた都會の自然公園とは違い、この街は本当に“自然”に、自然が存在している。規格からして違うのだ。

透き通った自然……とでも言つべきだろ？

「……こつも静かだと、どうにも眠くなつてくるね

あまりの心地よさと静けさが、僕の頭に確実な眠気を送り込んでくる。

このまま寝たら、さすがに風邪引っちゃうかも。……あ、で

も、学校は一週間後だし、別にいいかな

あつさりと睡魔に敗北し、僕はその場に寝そべると、襲いくる眠

気に身を任せた。

ちょうど、その時である。

ふいに、僕の視界を、何か白い 光のようなものが、掠めていった。

「ん……なんだろ」

光が通り過ぎていった方向に、眠氣をたっぷりと含ませた視線を向ける。

「…………」

そこでは、少女が舞っていた。

周りの自然と調和するように、軽やかに、そして華麗に、舞い踊っていた。

少女の纏う純白のワンピースと、髪に巻かれた漆黒のリボンは、主の舞いに合わせて、ヒラヒラと翻っている。僕の視線を掠めていったのは、恐らくあのワンピースだろう。

先程まで容赦なく僕を襲っていた睡魔は、不思議と消えていた。

「…………」

少女から視線を外すことが出来ない。まるで何かに押さえつけられたかのように、僕の視線は、寄り道することなく少女の元へとまっすぐに注がれていた。

夕日を浴びて映える、肩まで伸びた白銀の髪。

雪のように纖細で、純白の肌。

瞳は、左右で色が異なっていた。右は燃えるような真紅、左は落ち着いた群青。どちらの瞳も、まるで宝石のようにキラキラと輝いている。

「あ…………」

心で思っていることを、うまく言葉に出来ない。

ただ、彼女はそれほど美しく、可憐で。それでいて脆く、儂いも

のようにも思えて

長年ぶりに訪れた、なつかしい街。

昔のまま、純粹なまま残されていた自然の中で、僕は彼女と出会
つた

幕を開けた、懐かしの町での生活

「あっくん、おっはよ～！ 朝ですよ～……つてありや、起きてる」

「こらこら。どうして残念そなんだ」

素朴だけれど、やっぱり心地よくて

「そう言えば、アツはいつから学校なの？」

「早くあっくんと一緒に学校行きたいな～」

少しだけ大人になった二人の姿は、とても新鮮なものだった

「どう？ 私達の制服姿。ずっと感想を待っていたのだけれど

次回 PRISM - プリズム - 第二話 癒しと温和の黄玉 T
open (1)

第一話 癒しと温和の黄玉 Topaz (1)

ふと、少女と視線が重なり合つ。

「……」

先ほどまでの美しい舞いを止め、ただじっと、どこか探るような視線をこちらに向けてくる少女。

声を掛けようとしたけれど、彼女はどこか、それを拒むかのような神聖な雰囲気を纏っているみたいに思えて 僕はただ、そのまま左右で放つ色彩の異なる双眸を見つめ返すほかはなかつた。

「……」

無言。

彼女からの言葉は一切なく、視線は僕に向けられたまま、しっかりと固定されている。

何となく気まずくなつた僕は彼女から視線を外すが、おそらく彼女の視線は僕を捉えたままなのだろう、依然として彼女からの視線を感じた。

河の水の流れる音だけが、この場に響き渡る。

先ほどまでは心地よいと思えていた静けさは、今では緊張感を增幅させるだけ。こんな時だけ都会の騒がしさが恋しくなる自分のゲンキンさに苛立ちを覚えつつも、僕はこの状況に対する打開策を模索していた。

「……て」

「……えつ？」

不意に、今まで固く閉ざされていた彼女の桜色の唇が、微かな動きを見せた。

「今、何て……」

彼女の言葉を今一度確認しようと、僕は彼女に聞き返す。

が、

その時、一陣の風が僕らの間を吹き抜けた。

風圧に眼を覆つた僕が再び眼を開いたときには、
彼女の姿は、もうそこにはなかつた。

PRISM プリズム 第一話 癒しと温和
の黄玉 Topaz

軽やかに響き渡る小鳥のさえずりと、カーテンの隙間から洩れる眩い朝日で、僕の意識は覚醒した。

時計に目をやると、時刻は現在、AM 6:30。

後には欠片ほどの眠気さえも残らない、心地よい目覚めである。

「まさか、僕が目覚まし時計なしで起きられるなんて……」

祖母が丁寧に整えておいてくれたベッドの寝心地は、まさに最高だつた。それに加え、何の騒音も届かない周囲の静けさ。

自然と目が覚めるのも、当然と言えば当然だ。

夜通し開け放しにしておいた窓から、爽やかな風が室内に流れ込んでくる。幸い、今朝は昨日ほどの暑さを感じることはなかつた。それも寝心地のよかつた原因の一つかもしれない。

寝覚めの余韻に浸りつつ、どれくらい経つた頃だろうか。ドアを挟んだ廊下から、聞き覚えのある騒がしい足音が聞こえてきた。

「あっくん、おっはよー！ 朝ですよー……つてありや、起きてる

「こらこら。どうして残念そうなんだ

足音の発音原は、もちろん若菜だつた。ノックもなしに突然人の部屋に侵入してくる辺り、プライバシーの保護やらその辺の常識は甚だ欠如しているらしい。

「だつてさー。あっくん、前に来たときはネボスケさんだつたじゃん。私がいつも叩き起こしてたんだもん」

そうだったか。そう言われてみれば、そんな気がしないでもない。

祖母の家に来るたび、体の随所に原因不明のアザが多発していたのも頷ける。

「それで、僕をたき起させなくてがっかりしてるわけ？」

「うん。だから今度からは無理して起きなくていいよ~」

……せつかくいつもより早く、それも目覚まし時計なしで起きられたというのに、褒められるどころか、逆に残念がられてしまった。どうしたことだらう、これは。

「じゃ、私は先にリビングで待ってるから。着替えて降りてきて、早く朝ご飯食べよ」

「あ、うん。……って若菜もここで食べるの？」

「そだよ~。おばあちゃんがせつかくだから食べていけって言つてくれたから」

「そつか……」

「ん~？ なんで笑つてるの？」

「え？ いや。別に~」

どうやら、自分でも気付かぬ間に笑顔を浮かべていたらしい。久しぶりに若菜と朝食を吃るのが楽しみ。

そんな些細な理由で笑いを漏らしていたなんて、恥ずかしくて若菜には言えるはずもなかつた。

.....

「おはよう」

「おや。おはよう、純史」

リビングに顔を出すと、祖母たちがちょうど朝食の準備を終えたところらしかつた。漬物の入った皿をテーブルに置いた祖母は、そのまま自分の椅子へと腰掛ける。

「ご飯、味噌汁、納豆、漬物、海苔など、いたつて和風なメニューが揃う食卓。祖母の隣には、アキ姉の姿もあった。

「あひ、おはよアツ。ちゃんと自分で起きられたるようになつたのね。偉い偉い

そう言つて、柔らかに微笑むアキ姉。誰かさんの反応とはまるで大違いである。

そんなことを思いつつ、自分の隣をしきりに指差す当の誰かさんの隣へと腰掛ける。

「それじゃ、純史も起きてきたところだし、食べるといよ」
祖母呼びかけに応えるかのように、僕は手元にあつた箸を構えて臨戦態勢へと突入した。

どうやら今朝は、僕の胃が糧を求めてやまないようだ。普段は十中八九、登校直前まで爆睡している僕にとつては、非常に珍しい事態である。

「そうだね。珍しく、僕も朝ごはんを食べられそうだよ」「つてアツ。いつも朝ご飯食べてないの？」

失言だと気が付いたのは、僕の発言がアキ姉の耳に届いた後のことだった。

時すでに遅し、後悔先に立たず。とはまさにこのことか。

「あのねアツ。朝ご飯食べないと元気出しちゃっても出せないわよ。6年前にも言つたはずなんだけどなあ。そう言えども、あの頃からアツは朝ご飯を食べないで……」

「ほ、ほらアキ姉！早く食べないと本当に朝ご飯食べられなくなっちゃうから！」

アキ姉はまだ何か言いたげな表情を浮かべていたが、僕は無理やり話を先に進める。せっかく寝覚めのいい朝が、アキ姉の説教から始まるのはさすがに避けたかった。

それに実際、そこまで余裕を持て余せるほどの時間もないだろう。朝の5分は、退屈な昼の1時間にも値するのだから。

「それじゃ、いただきます」

「 「 「 いただきます」 」

祖母を筆頭に両手を合わせ食前の挨拶を済ませると、さっそく僕は眼前に広がる朝食に手を伸ばした。

「 うん……おいしいよ、ばあちゃん」

どこか懐かしい味。見た目で言えば普通の和食だが、数年前にも味わったことのある、祖母の味だった。

「 そう言えば、アツはいつから学校なの?」

酸味のきいた漬物を味わっている僕に、アキ姉の声が掛けられる。

「 えつと……だいたい一週間後からだよ」

「 早くあっくんと一緒に学校行きたいな」

うきうきといった様子で微笑む若菜。勢いよく手を上げたせいか、手にしていた箸を床に落としてしまっていた。

「 僕も、早く若菜やアキ姉と一緒に学校行きたいな。一人の学校生活って、まだ見たこと無いし」

「 ま、学校生活とは言つても普段とあまり変わらないわよ。それより、どう? 私達の制服姿。ずっと感想を待つっていたのだけれど」

アキ姉のじろりとした視線が、僕を捕らえる。

特に意識はしていなかつたが、今朝は一人とも制服姿。いざ制服姿の二人を見つめ直してみると、やはりどこか新鮮な感じがした。黒を基調としたブレザー風の制服。胸元には、校章を模つた絢爛なアップリケと、煌びやかな真紅のリボンが輝いている。

二人とも同じ制服を着ているのに、若菜はより可愛らしく、アキ姉はより大人っぽく見えるのだから不思議なものだ。正直、二人にとてもよく似合っていた。

「 うん。よく似合っているよ、一人とも」

「 ……それだけ?」

何故か不満げな声と視線を僕に向けてくるアキ姉。対象的に、若葉は「似合つてゐるって言われちゃつた! わ〜い!」などと嬉しそうにはしゃいでいる。

「 ま、アツらしいと言えばアツらしいけどね」

一体、今の感想のどこに不満を抱いたのか。よく似合つていて
言つたはすだし、酷評した覚えもないのだが……。

“女心”というもの理解するには、まだまだ時間がかかりそう
だった。

.....

.....

.....

.....

「じゃあ、アツ、おばあちゃん。行つてきます

「行つてきま～すっ！」

眩い日光を、頭上の木々が光の落ち葉のよつに散りばめる玄関先。
僕の瞳は、制服姿で鞄を持つ若菜とアキ姉の姿を映していた。

最後に会つたときにはまだ小学生だった二人。今の姿を見ると、
本当に一人が高校生なのだという実感を改めて受ける。

だが逆に、自分があの二人に混じつて一緒に登校している場面は、
まだ想像できなかつた。

「いつてらつしゃい！」

「氣をつけて行つてくるんだぞー！ 特に若菜！」

一人の声に、大きな送り声で応える祖母と僕。

「あーひどいよあつくん！ 私よりあつくんの方が……」

不平を漏らす若菜の声も、だんだんと小さくなつてゆき、やがて
聞こえなくなつた。

普段からうつかりしていいる若菜。こんなことを言つべきではない
のかもしれないが、事故に遭う危険性がないとは言い切れない。実
際、数年前にも危つい場面をちょくちょく目にした記憶がある。

だからこそ、特に気をつけて欲しかった。

「でもまあ、今までも事故に遭っていないみたいだし、アキ姉も一緒にいるんだ。大丈夫だよね」

「私としては、純史も十分心配なんだけじねえ」

ふと、祖母の声が耳に届く。

「僕は大丈夫だよ、ばあちゃん。ちゃんと気をつけているから」

「おや。以前ここへ来たとき、車に轢かれそうになつて泣きながら帰ってきたのはどこのだれだつたかな?」

「……」

残念ながら、反論するにはできなかつた。

「さて、それはさておき、純史。今日もヒマなんだろ?」 少し散歩でもしてきただい?」

「え……でも」

そうしたい気持ちは山々だが、食後の片づけや、部屋の掃除、洗濯など、やるべきことも山々だ。それら全てを祖母にやらせるのもさすがに忍びない。

僕の急な引越しで、ただでさえ祖母に相当な負担を掛けてしまつているはず。これ以上の負担を祖母に与えることなど、僕には出来なかつた。

「いいからいいから。私に気を遣う必要は無いんだよ。來たばかりの町なんだから、まずは慣れてもらわないとねえ」

そう言つて、優しげに微笑を浮かべる祖母。

彼女の笑顔は、本当に“温かい”という形容がよく当てはある。全てを包み込むかのような、寛容的な笑み。この笑顔を前にすると、ついつい甘えたくなつてしまつのも事実だが、今回ばかりは話が別である。

「お言葉に甘えて……と聞こいたいところだけど、やっぱり食事の片づけくらいはやらせてよ。僕だって家族の一員なんだからね」

同じく僕も微笑みを浮かべながら、祖母に言つた。

「……そうかい。ありがとね、純史。そんじや、やつやとやつやま

うかね

僕の言葉を静かに諒解した祖母は、一度気合を入れ直すと、再び家の中へと消えていく。

「ありがと、ばあちゃん」

小さく一言呟き、僕も祖母の背中を追つて、まだ見慣れぬ玄関に足を踏み入れた。

(2007/2/19)

第一話 癒しと温和の黄玉 Topaz

… · · · · (1) (後書き)

次回予告

不思議な魅力を持つ河原

「……やあ、また、会ったね。」

そこで僕は、昨日の少女と再会する

「……私は、スイ」

寡黙な彼女との交流

「……おかしな顔」

そして、さりそく立ちふさがる困難

「……つて、不安的中はやつ！」

PRISM - プリズム - 第一話 癒しと温和の黄玉

Topaz

z . . . (2)

癒しと温和の黄玉 Topan (2) (前書き)

長らくお待たせして申し訳ありませんでした。

学校の定期テストの為、執筆が滞っていました。

感想、評価など頂けると、作者が狂ったように書びます。

ではでは、お楽しみくださいませ^ ^

癒しと温和の黄玉 Topaz (2)

第一話 癒しと温和の黄玉 Topaz (2)

都会に住んでいた頃は とは言つても、つい一昨日までの話ではあるが 僕はこうして散歩というものを堪能すること自体、滅多になかった。

別に歩くのが退屈、億劫などといった、怠惰な理由からではない。ただ単に、荒んだ街中を歩くのを極力避けたかったためだ。

そもそも僕は、行く当てもなく、周囲の風景に目や耳を傾けながら歩むこの“散歩”という運動が好きだ。

いつもは何気なく通る道にも、よく観察してみると、今までにはなかつた発見があつたりする。それがまた新鮮で、飽きを誘わない。が、それはあくまでも通常の、見る価値のある風景に限定しての話である。

自分の住んでいた町はどうだ。

排気ガスが空を覆い、周囲を汚染された空気が包み込む、劣悪な環境。目にする風景といえば、無機質な工場に、近代的なビル。灰色の世界。

それを美しいと形容する人間もいるかもしね。そんな人たちの美的価値観を否定する気もまったくない。

しかし僕にとって、その風景は美しくもなんともない、醜悪以外の何物でもなかつた。

だから、学校の無い休日、稀に電車や自転車で少しだけ遠出して、綺麗な風景の中を一人で歩いたものだった。

月に一度、あるかないかの楽しみ。都会生活で、それは僕の“癒

し”の一つだった。

「……」

一体いつからだろ？。こんなにも都会を嫌うようになったのは。昔は、自分の住んでいた町に少なからず誇りを持っていた筈なのに。

「……もう都會に住んでるわけじゃないんだ。しばらくはここで暮らせる。やめよ、こんなことを考えるのは……」

静かに自分に言い聞かせると、僕は再び、周囲の風景に視点を移した。

青が支配する大空を、一匹の雀が気持ち良さそうに羽ばたいていった。

つた。

.....
.....
.....
.....
.....

気がつくと、僕は昨日の河原へと足を運んでいた。
昼間に見る河原もまた美しく、静かに流れる水面が、雄大な青を反射している。

「なんか、やっぱりここって落ち着くよ」

昨日と同様、僕は草の上にだらしなく寝そべる。突き刺す日差しが目に痛い。

蝉の鳴き声が鬱陶しくも、どこか愛らしく、心地よい。

と、真昼間から呑気に河原で寝そべっている、傍田には一ートとも捉えられない少年の横。柔らかにそよぐ、草のソファの上に。静かに、何かが置かれた。

「……やあ、また、会ったね」

優しく吹き抜けていく風が、彼女の白銀の髪を、漆黒のリボンを、さらさらと揺らしていく。

「君も好きなの？この場所が」

昨日も感じた、彼女の神聖で神秘的な雰囲気。しかし今は、不思議と、ごく自然に、僕の言葉は彼女へと向けられている。

彼女が今、昨日よりもずっと近く、すぐ隣に腰掛けているというのに。

どうしてだらう。今なら、彼女に話しかけることを許されている、そんなふうに感じた。

「……うん」

帰ってきたのは、僅か一言の返事。それも、ごく短い返し言葉。それでも、ようやく彼女の声を聞くことが出来た。

「そつか。君はよくここに来るの？」

「……うん」

「へえ。いい場所だもんな、ここ」

「……うん」

「なんかここって癒されるよなあ」

「……うん」

僕が話す言葉に、彼女が返事をするだけ。

到底、会話が成り立っているとは言えない。

だが

彼女の声はどこまでも澄んでいるようで、それら一回一回の返事が、僕の心を、ちょうど目の前で流れる川のように、ゆっくりと、優しく、癒していく。

よほどコミュニケーション意思の高い人間、もしくは決まった目的がある人間でもない限り（動機は不純の場合もあるが）、道端でたまたま会った赤の他人に、べらべらと話しかけるような真似はないだらう。

僕自身、そのような積極的な人間ではなかつた筈なのだが。

「そうだ、とりあえず自己紹介しとくよ。僕は“白河 純史”。つい昨日、この近くに引っ越してきたばかりなんだ」

たまたま河原で会つた少女に、特に意味もなく話しかけ、あげく自己紹介までしているとは。

都会から離れて開放的にでもなっているのだろうか。

何にあれ、彼女に話しかけ、自己紹介をするに至るまで、自分の中に躊躇というものがまったくなかつたことは確かだつた。

「……私は、スイ」

「スイ……」

綺麗な名前だな、と思った。

そして、不思議な名前だな、と思った。

「ごく短い一音に含まれた、透明な響き。無限に広がるイメージ。いい名前だと、素直に感じた。

「いい……名前だね」

「……そう、かな」

そう漏らす彼女の視線は、どこまでも遠く、まっすぐ向けられているように見えて。

その視線の元、彼女の双眸は、どこか漠然とした悲しみのようなものを見している。

……同じく漠然と、そんな風に感じた。

「あ、そうだ！　えと……スイ」

「……？」

やや躊躇いがちに彼女の名前を呼んだ僕に、スイは首を少しだけ傾けて応える。

「あのさ、僕、今日はこの町のことをもうと知りたいんだ。これら町を回らうと思つてるんだけど、よかつたら案内してくれないかな？」

「……私もこの町のこと、あまり知らない」

伏目がちにそう告げるスイ。ひょっとすると、彼女もこの町に来たばかりなのかもしれない。

ならば、それならそれで、逆に好都合でもある。

「だつたら、僕と一緒に町を回らない？　一人よりも一人のほうが楽しいって思うんだ。いや、絶対楽しいよ」

「……」

思えば、じつじて見ず知らずの女性を誘うのは、生まれて初めての経験だった。

緊張はない、と言えばやはり嘘になる。

僕にとっては長すぎる沈黙の後、ようやく彼女は口を開いてくれた。

「……わかった。私と行つても……楽しくないと、思うけど……」
結果から言えば、答えはイエス。だが、いまいち消化不良な回答だった。

「ほら、せっかく一緒に行くんだから。楽しく行こう。」

僕はスイに手を差し伸べつつ、自分の中で極上の笑顔を向けた。
自分で自分の顔を見ることは出来ないが、よほど不自然な表情になってしまっていたのだろう。

「……おかしな顔」

スイは差し出された手を取ると、ちょっとぴり痛い言葉を僕に向ける。

だけど、気付かないほど、ほんの少しだけ。

その端整な顔に笑みを浮かべてくれた……そんな気がした。

比較的爽やかだと思っていた気候は、昼になると見る影もなくなってしまった。代わりに待ち受けていたのは、昨日と同様の灼熱地

獄。燐々（さんさん）と自己主張を続ける太陽が地上を照らしつけ、半袖からのぞく素肌をじりじりと焼いていく。

持参してきたハンカチは既に余すところなく湿りきってしまい、

今となつては拭つても逆に気持ちが悪い。

絶えず噴き出す汗を処理する手段は、もはや残されていなかつた。

「……えと、スイは暑くないの？」

隣を歩くスイに視線を移してみると、この猛暑の中、なんと汗一つかいでいないではないか。

確かにスイの着用しているワンピースは涼しげなデザインをしているが、それでも汗の一つくらいはかいてしまうのが自然というものがどう。

それにも関わらず、スイは汗を浮かべるどころか、暑そうな表情を見せることすらなかつた。

「……うん」

じゅらが暑がつてていることのまゝが逆に不自然とも言いたそうな表情を浮かべつつ、僕の問い合わせるスイ。

この子は暑さに強い体质でもしているのだろうか。そうだとしたら、実に羨ましい限りである。

「あー、アイス食べたいな……」

「……さつきも、食べてた」

夏はどうしても体が冷たい飲食物を求める。体の欲求に応え、ついつい冷たいアイスやジュースを過剰に摂取してしまうのが、僕の昔からの悪い癖だった。

昔はそのことでよくアキ姉から注意を受けていたのだが、ここ数年、アキ姉と会うことがなくなつていた間に、そういうものの摂取に拍車が掛かつてしまつたようを感じてならない。

「おなか壊す……」

「……そうだね。それじゃ、今日はやめとこつかな」

「……そうした方が、いい」

スイもこう言つてくれていることだ。いづれはアキ姉からも注意

を受けるだらうし、いい機会だと思つてアイスやジュースの過剰攝取は控えようか。

尤も、意思が本能に勝ることが出来れば、の話だが。

「あれ……」

そんなことを話しているうちに、周囲の風景は随分と変化していた。

今まで見てきた自然的な風景と比較すれば、やや都會じみた風景。が、それもほとんど不快感を覚えない程度で、空氣も決して不味くはない。むしろ心地よさを覚えるくらいだつた。

近くには巨大なデパートらしき建造物がそびえ立ち、喫茶店や小さな飲食店なども各所に見受けられる。加えてお昼時だからだらうか、平日だというのに、周囲はかなりの混雑を見せていた。

持参していた地図で現在位置を確認してみると、どうやらこの場所、透水町の中心街のようである。そう考えれば、やや都會的な風景も、平日の真昼からの混雑ぶりも、納得できる。

「なんだか、賑やかな場所だね」

「……うん」

やはり興味深いのか、スイはきょろきょろと周りを見回し始める。その仕草が小動物のようにも見え、どこか可愛らしく、微笑ましかつた。

そのままひょっこりとどこかへ行ってしまいそうだ、やや不安ではあるが。

そして、残念なことに僕のこいつた不安は的中してしまった確立が非常に高いようで。

一瞬、僕が腕時計に視点を移した隙に。

スイは早速、僕の視界からその姿を消していた。

「 って、不安的中はやつ！」

スイの年齢は、外見から判断してもおそらく僕と同程度だらう。さすがに16、17歳にもなつて迷子になるということはないと思つが、一緒に町を回ると約束した以上、このままスイを放置し

て一人で行動するわけにもいかない。
やはり、探すしかないか。

この、混雑の中を。

出会つたばかりで特徴も掴みきれていない、たつた一人の少女を見つけ出す。

どう考えても困難だが、やるしかない。

「……考へてる時間も勿体無いか」

探すなら、遠くへ行つていないうちのほうが良いに決まつてゐる。
今ならまだ、比較的スイを見つけやすいはずである。

頭の中でスイの顔や服装、一つ一つを丁寧に思い浮かべつつ、僕は人混みの中へと足を踏み入れた。

癒しと温和の黄玉 Topaz (2) (後書き)

次回予告

「リリにもいなか……」

「あ、うん。ちょっとお尻を打つたみたいだけど、ぜんぜん大丈夫だよ」

「一度だけなら聞き逃してあげるよ」

「えへへ～。まだまだだね、純史くん。鬼ごっこも頭を使ったほうが勝ちなんだよ?」

次回 PRISM - プリズム -

第一話 癒しと温和の黄玉 Topaz (3)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6001d/>

PRISM プリズム

2010年12月14日02時50分発行